



北九州市



雲のうえ 34



## 「住む」より「楽しむ」BESSの家

自然の木をふんだんに使った BESS (ベス) の家。

とても個性豊かな家たちです。

BESS がめざすのは、その家の先にある楽しい暮らし。

手をかけながら、毎日を愛おしむ。

家族がおおらかに笑いあう。

そんな暮らし、感じに来ませんか？

個性豊かな木の家がいろいろ。楽しい暮らしを体験できる場。

ログウェイ  
**LOGWAY**  
**BESS** 博多

福岡空港から車で6分

〒812-0863 福岡市博多区金の隈1-39-7  
TEL.092-583-3700 (代)

営業時間 10:00-18:00  
定休日 火曜・水曜・木曜 (祝日は営業)

交通 | 最寄駅・JR南福岡から約4km  
西鉄雑餉隈から約3.5km

ログウェイ  
**LOGWAY**  
**BESS** 北九州

国道三号線遠賀バイパス沿い

〒811-4331 遠賀郡遠賀町別府3713-3  
TEL.093-291-1700 (代)

営業時間 10:00-18:00  
定休日 火曜・水曜・木曜 (祝日は営業)

交通 | 最寄駅・JR遠賀川駅から約2km



ご予約優先でご見学いただいております。  
感染症予防対策を万全にして皆様をお迎えしております。



小倉北区

下り新幹線

右側の車窓



くおたよりく

新幹線に乗り新下関駅を過ぎると、すぐトンネルに入ります。真つ暗な中を数分走って、小倉駅の乗り換えアナウンスが流れはじめると、右側の窓に突如バーン！と工業地帯が見えます。港、フェリー、商業ビル群……まぶしい！毎回、ワクワクしてしまいます。

田村昭久さん (山口県下関市)

「次は小倉に停まります」アナウンスを聞いて、車窓を覗き込み、暗闇に目を見張る。

ガタン、ゴトン、ガタン……ややスピードを落とした新幹線が地上に出ると、まず飛び込んでくるのはポツカリと開けた空。その下に広がる広大な港の風景行き交うフェリー。そして、北九州のシンボルともいえる工場煙突が見えたときの、「ああ、帰ってきた」と感じる瞬間！

この街と縁を持つ人ならば誰でもときめく、北九州上陸時の風景を挙げてくださった方、実に多数。本州から陸路で北九州に入る方、くれぐれも席は進行方向右の窓側をリザーブしてください。願わくば、暗闇の向こうであなたを迎える空が、いつも青空でありますように。

目次

2 特集 北九州、

わが心の風景。

写真いわいあや 絵と文 牧野伊三夫 取材と文 大谷道子

下り新幹線右側の車窓(小倉北区)

高塔山公園から眺める街の風景(若松区)

河内野水池(八幡東区)

清滝の路地(門司区)

中央卸売市場岸壁から見る関門海峡(小倉北区)

若戸大橋と渡船(若松区・戸畑区)

青春の東映会館(小倉北区)

馬の慰霊碑(小倉北区)

低い高架(小倉北区)

鉄の会社の木造社宅(戸畑区)

東京へ行ったクスノキ(八幡西区↓東京都中央区)

動けない地蔵(若松区)

曲里の松並木(八幡西区)

夜の工場群(八幡西区)

夫が握ったジャンглジム

朝の坂道

旦過市場(小倉北区)

ベラム山荘(若松区)

錆の表情(門司区)

旧・銀星幼稚園(八幡西区)

ねじりまんぼ(八幡西区)

門司港の夕陽(門司区)

18 風景をめぐる随筆

本屋の角 絵と文 牧野伊三夫

「窓のうえ」34号

絵・題字 牧野伊三夫 写真 いわいあや

アートプロジェクト 有山達也 編集 大谷道子 校正 齋藤晋

©北九州市2022

本誌記事・写真・イラストレーションの無断転載を禁じます。

# 特集 北九州、 わが心の風景。

海。山。緑。工場に、街のにぎわい。  
いまはなき懐かしい場所の空気と、そこにいた人のこと。  
一昨年からの移動すらままならない日々の中で、  
ああ、幾度思い浮かべたことでしょうか。  
誰の心にも必ずある「北九州といえば、ここ」という景色。  
皆が知っている。ポピュラーな場所から、  
知る人ぞ知る秘蔵のスポット、そして、  
何気ない景色のように見えていても  
実は特別な思い入れのこもった場所まで。  
読者の皆さんの思い出を携え、訪ね歩いた  
久しぶりの北九州の街の風景をお届けします。

写真〓いわいあや  
絵と文〓牧野伊三夫  
取材と文〓大谷道子

〓おたより〓

ベタですが、若松の高塔山頂上からの  
風景が好きです。若戸大橋、海、工業地  
帯が全部一度に見渡せます。

竹本理絵さん（八幡西区）

高塔山の展望台から眺める街の景色が、  
私は好きです。とても北九州らしいと思  
います。

山田祐介さん（八幡西区）

若松区

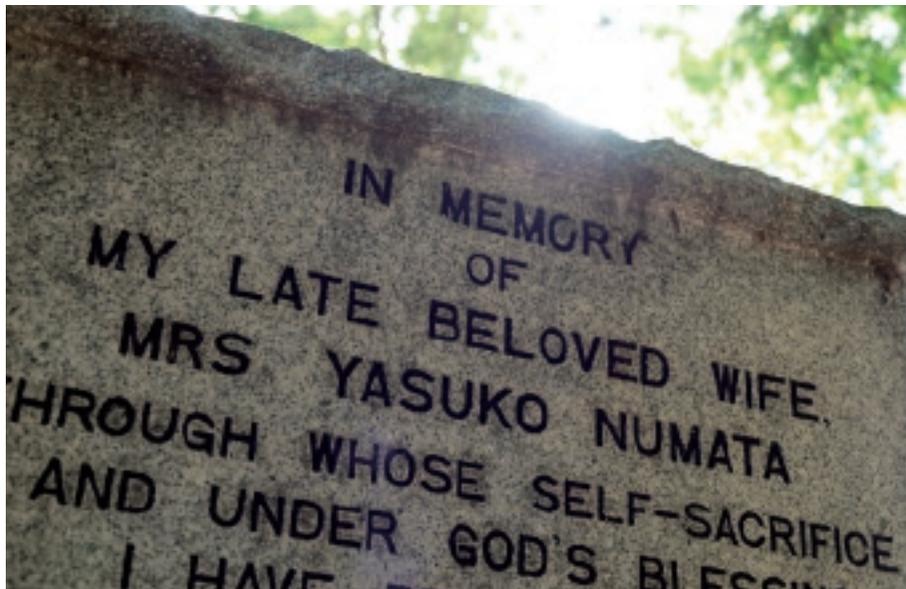
高塔山公園から眺める

街の風景

山頂にある高塔山公園展望台広場より響灘を望む。若戸大橋、皿倉山、湾岸に広がる工場地帯、その上を、低くゆったりと雲が流れる。ザ・北九州！の要素が凝縮した眺めを楽しむならやっぱりここ、と推す声多し。公園は四季の花々で彩られ、夜は燦然と輝く夜景が眼下に。



妻恋の碑の文面は、表が漢詩で裏は英文。  
沼田は土木技師でありながら詩作をたしな  
むなど、文学的素養の豊かな人物だった。



皿倉山から関門海峡に注ぐ板櫃川、その上流にある河内貯水池は、かつて官営八幡製鐵所の工業用水確保のために造られた人造湖。1919（大正8）年に着工し、1927（昭和2）年に竣工、現在も稼働している。森に通じる堅牢な堰堤の上を歩く。表面の精密な石積みは歲月の風雨にさらされながらもころびもなく、美しさを保っている。中ほどにあるドーム型のポンプ庫、その入り口には当時の製鐵所長官の筆で（吟龍雨風）と刻まれたプレートが掛けられていた。龍吟すれば風雨来る。恵みの雨を呼ぶ言葉なのだろう。「こんな巨大な建物や装置がすべて人間の手によって造られたというのが信じられない。ひとりひとりの力は小さくても、集まればすごいことができるのだ

と思えます」。書き添えられたおたよりの言葉に、深く頷く。2007（平成19）年には鉄鋼―八幡製鐵所関連遺産として、近代化産業遺産に認定された。周辺にはサイクリングロードや公園が整備され、四季折々の憩いの場になっている。市民にとっても親しみやすい場所にとの願いを込めて設計したのは製鐵所土木課長（のちに土木部長）の沼田尚徳。実直な仕事人だったと伝えられる彼の人のなりを伝える場所が、貯水池近くの白山神社の一隅にあった。国家的事業に邁進する彼を支えながら、完成を待たずして世を去った妻・泰子を哀悼した妻恋の碑。満々とたたえられた淵の水は冬の陽に照らされ、降り注ぐ木洩れ陽が、愛と感謝の痕跡を静かに包んでいた。



八幡東区

## 河内貯水池

堰堤全景。8年の歳月をかけ、のべ90万もの人が動員され行われた大規模工事だったが、ひとりの殉職者も出なかったという。



「おたより」  
河内貯水池の堰堤と遊歩道。若い頃は友人同士で訪ね、現在は夫とふたりでたまに歩きます。一個一個人の手で積み上げられた細やかな石積みは、まさに芸術！ 道路から堰堤に入ると見える、満々と水をたたえた貯水池。空の青、そして、向こう側に見える森……言うことなし、の風景です。

坂本久代さん（八幡西区）

# 清滝の路地

岡崎さん、思い出の路地で。行き止まりは多いが、海風が吹いて爽やか。近年は古民家をカフェや宿に再生する取り組みも。



迷い込む——まさにそんな印象の坂道だ。関門海峡を望む門司山手の清滝。かつて料亭や置屋が軒を連ね、社交場として栄えた地域は、戦後は閑静な住宅街に変貌。人がふたり、バイク1台がやっと通れる路地のそこそこに、遠い昔の華やかと昭和の空気が渾然一体となっている。「実際、迷うんですよ」と言うのは、門司区出身のグラフィックデザイナー・岡崎友則さん。中学時代、部活の友人に誘われて始めた新聞配達で、毎朝、レングアに囲まれた路地を歩いた。「雰囲気、ちつとも変わってないですね。住んでいる人以外はなかなか足を踏み入れない場所ですが、山があつて路地があつて港が見渡せて……。ここには門司のすべてが詰まっているように、思い入れが強いです」

この先で幽霊を見たこともありませんですよ、と岡崎さん。白い服を着た女性の足が、少し石畳から浮いていたという。たしかに、そんな時空の歪みに陥っても不思議ではない風情ではある。

## くおたより

福岡市近郊の町で育ち、就職先もてっきり福岡だとはばかり思っていたところ、北九州への配属を言い渡されました。

不安な思いでやってきた20歳の頃、鮮魚市場の岸壁に着く船の荷物を運ぶ業務が週2回ありました。対岸まで泳いで行けそうなほど狭い海峡を行き交う、大小の船。その先は、山口県の彦島です。潮の流れによって、どちらかに向かう船は速く、もう片方へ向かう船は遅く進むことを知りました。

九州のてっぺん、そして向こうは本州なのだと思うと、新しい街に来たこと、その街で仕事をしていることを強く感じ、毎回、行くのが楽しみになりました。

何年かのち、第二関門橋が完成すれば、あそこから見える景色も一変するのでしょうか。

扇 大樹さん（戸畑区）

小倉北区

冬の海の荒々しいうねりも、近くの食堂で食べた熱々の中華丼の味も忘れがたい、とおたより主。青春の海峡はいまも胸の中に。

# 中央卸売市場

# 岸壁から見る

# 関門海峡



## 若戸大橋と

### 渡船

「看護学生だった頃の乗船料金は20円。実習に行くときは始発で、帰りは最終で。ギリギリの時間に全力疾走して飛び乗っていました」(渡邊由美子さん・山口県下関市)「若松の親戚の家に行くときはバスと渡船を乗り継いで。短い船旅でしたが、いまも懐かしく思い出します」(K・Uさん・小倉北区)

出航した船は、ほぼ若戸大橋と並走。海上から眺める赤い橋は、青空と白い雲に実に映える。現在は車道のみだが、かつては人道と呼ばれた歩道があり、歩いた思い出を持つ人も多い。

「小学校3年生のとき、父母と3人で人道を渡り、父が橋の上で母と私を写真に収めてくれました。晴天で、とても見晴らしがよく、煙突の向こうに皿倉山がどっしりと鎮座していました」と思い出を寄せてくれたのは、小倉南区に暮らす村中裕記さん。藤色のワンピースに日傘をさしていた母は翌年、病で早世したが、その姿は胸に鮮やかに焼きついたままだ。

1962(昭和37)年の開通以降、人々の思い出の背景となってきた若戸大橋。まもなく国の重要文化財指定を受けようとしている。



横石久美子さん(福岡市)

くおたより

亡父は外国航路の船員でした。鉾石運搬船に乗務する際など、ときおり戸畑<sup>とぶた</sup>に行っていて、長期停泊するときには長崎から家族3人で会いに行きました。大きな赤い若戸大橋のたもとで数日間過ごしましたが、ほかの土地と違う風情ある風景がたいへん印象に残っています。夏祭りのとき、10円で乗船できたことなど、いまも懐かしく思い出します。

乗船料は大人100円、子どもと在住のシニアは50円、自転車も同額。わずか3分の日常の船旅は、心洗われるひととき。



# 青春の東映会館

くおたより

井筒屋本店の隣にあった東映会館！

古着屋さんがいっぱい入っていて、学生の頃、よく買い物に行きました。

丹生直伸さん（福岡県遠賀町）



みかげ通りと勝山通りの角にあった東映会館（昭和42年原田晴雄氏撮影・三浦久子氏提供）。建て替わったいま（右下）も、周辺をたぐさんの若者たちが行き来する。

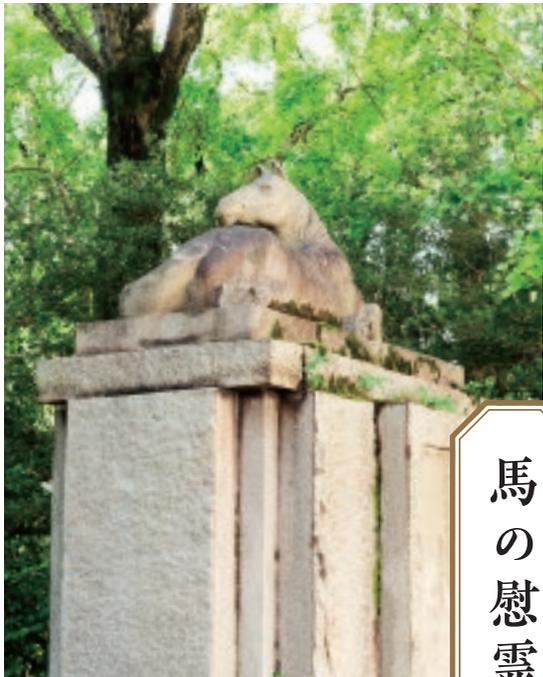


昭和後期から平成初期に若き日を過ごした人が思い出を語る時、必ず登場する場所——それが東映会館。映画館と飲食店が併設されたファッションビルには、多くの若者たちが集った。その場所を青春の聖地とするひとりが、住田卓哉さん。小倉で洋服のセレクトショップを営んでいた彼が最初にファッションに触れたのが、ここだった。「アメカジ（アメリカンカジュアル）全盛だった90年代、地下にあった『ウェストコースト』に通っていたんです。その店の人たちが、本当にカッコよくて」専門学校を卒業後、鉄鋼会社

に就職が決まっていたのを返上し、「直談判して」働きはじめた住田さん。リーバイスのデニム、ニューバランスのスニーカー、レッドウイングのワークブーツ。憧れの店で好きなアイテムを扱う日々は夢のようだった。

「店の人もお客さんも仲がよくて、ファミリー感がありましたね。正月の初売りでは、祝いで店員が先にへべレケになっただりして（笑）。小腹がすいたら、喫茶店『アルク』のナポリタンか、『OCM』のサンドイッチ。あそこに勤めてなかったら知り合えなかった人が、大勢います。実は嫁さんと知り合ったのも、東映会館だったんですよ」バブルが弾け、2004（平成16）年9月には東映会館も閉館。だが、仲間との絆は堅固だ。現在は園芸店に勤める住田さんは、店がかつての常連客から「東映会館にいましたよね？」と声をかけられることもあるという。心の青春は、不滅なのだ。

# 馬の慰霊碑



正式名称は「軍馬忠霊塔」。日露戦争以降に従軍した数十万頭の軍馬を弔うため、市民からの街頭募金で建設された。戦場で傷つき立ち上りなくなった馬が隊列を見送る悲しげな姿をかたどったとされる像は、八坂神社東門前広場の一角で軍都小倉の歴史を静かに伝えている。

くおたより

八坂神社の敷地内にある馬の像。氣にな

なって調べてみたら、戦時中、全国から

軍馬として小倉に集められた馬たちが門

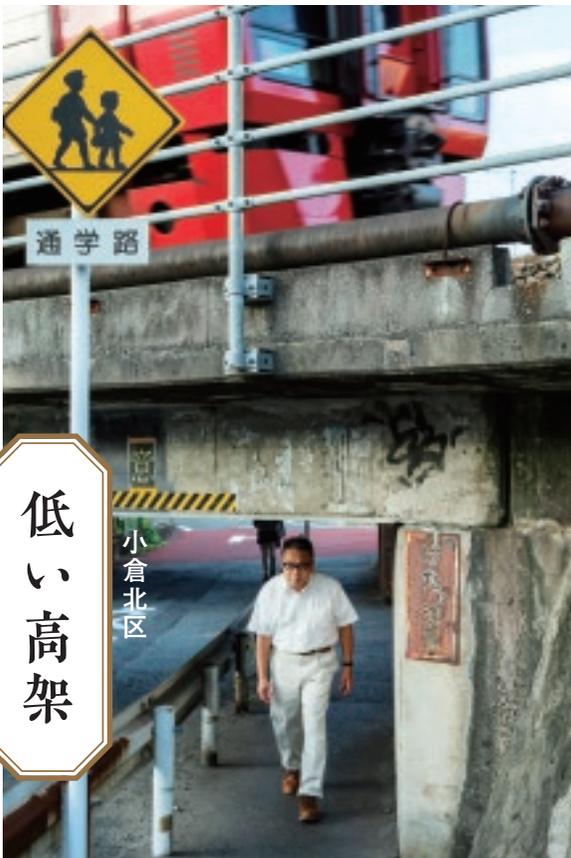
司港から戦地に送り出され、戻ることが

なかったという悲しすぎる歴史がわかり

ました。ここを通るたび、心の中で馬た

ちの冥福を祈り、合掌します。

高宮昭子さん（小倉北区）



# 低い高架

くおたより

貴船町と東篠崎の境目、JR南小倉

駅と城野駅の間にある高架線路。高架と

いっても、高さ制限が1.6メートルと

いう低い「高架」。鉄ちゃんにはたま

らないスポットです。

佐藤全さん（小倉北区）

JR日豊本線が走る線路。すぐ下を歩くと、轟音と振動に「近っ！」と思わず声が出る。しかし、住民や通勤通学者たちにとっては、これも日常の風景。徒歩でも自転車に乗ったままでも、誰もが器用に首をかしげ、立ち止まることなく通り過ぎる。初心者にはくれぐれも要注意で。



鞘ヶ谷地区の東西におよそ500戸あったという木造住宅。谷口さんの入居当初、台所はまだ土間だった。いまは写真と記憶の中にある、家族の原風景。

戸畑区

## 鉄の会社の木造住宅

昭和46年に結婚してすぐ入居したのは、新日鐵の鞘ヶ谷社宅。杉の板塀に囲まれた、平屋の木造住宅でした。

戦後すぐに建てられたもので、入居したときにはすでにポロポロ。借り手も少なかったのので、二軒長屋を丸ごと借りて、壁を抜いてひと続きにしてみました。玄関を入ると、すぐ8畳の部屋があり、台所と3畳、奥に6畳。それを2軒分です。古い造りだから隙間風がひどく、冬の夜は0度を下回ることも。家族でくっついて眠りました。

それでも、縁側があつて庭もあり、そこで植物や野菜を育てたり、砂場を作ったり。子どもにせがまれて犬も2、3匹飼いました。団地やアパート型の社宅に比べれば広くて自由があつて、恵まれていたと思います。

ご近所づきあいも盛んでしたよ。午前中の家事が終わると、近所の皆が集まって、いわゆる「井戸端会議」です。第二次ベビーブームの頃でしたから、子どもも多くて、すぐ側を流れる川や土手、裏の金比羅山で、みんなよく遊んでいました。お盆になると、本格的な櫓を建てて盆踊り大会をやりましたし、社宅の自治会で催す町内対抗運動会のほうが、小学校のそれよりもにぎやかなくらいでした。

昭和59年頃に別の社宅に移つてすぐ、その社宅は取り壊しになりました。いまは商業施設が建っていて、当時の面影はありませんが、近所の人たちとのつきあいはずっと続いています。写真を見ると、懐かしいですね。(八幡東区 谷口邦子さん・談)

その2本の木は、かつて黒崎のホテルの敷地内に並んで立っていた。それぞれ樹齢およそ100年のクスノキ。ホテルは撤退し、建物と人の姿は消えた。いま、木々は東京・日本橋のオフィスビルの対角に立っている。ホテルの土地を取得した不動産会社が2本のクスノキをここへ運んだのは、2011(平成23)年のことだった。

「この年は、日本橋が開通してちょうど100年目の年。そこで、同じ100年の樹齢を数えるこの木を、長崎街道の入り口である黒崎から山陽道、東海道でつながる日本橋に移植しようという案が持ち上がったようです。仕事柄、土地とご縁を大事にしたいという思いもあつたと思います」(野村不動産都市開発事業本部・鈴木卓子さん)

約1000キロメートルの遠路、生きた木々を運ぶ困難を乗り越え、実現した移植。2本のクスノキは都心に根を張り、行き交う車や人々を見守っている。



八幡西区→東京都中央区

東京へ行った

クスノキ



日本橋室町野村ビル(YUITO/ユイト)の南東角に移植されたクスノキ。隣接する福徳神社の御神木としても親しまれており、ランチタイムには人々がその木陰に集う。

# 動けない地蔵



人里に害を及ぼす河童の妖力を、山伏が折禱を行い、釘を打って地蔵の下に封じた。高塔山公園の「河童封じの地蔵尊」は、大の河童好きとしても知られた若松出身の作家・火野葦平が伝承をもとに創作した物語「石と釘」から生まれた。背中側を覗き込むと、たしかに釘が。

くおたより

高塔山の頂上にある河童封じ地蔵。背

中に釘が刺さっているという、一見シュールなお地蔵さんです。

竹本理絵さん（八幡西区）

くおたより

子どもの頃から見ながら育った曲里の松並木。社会人になってから、縁あって整備に携わるようになった。それから30年以上の間、PRやイベントを行い、変遷を見てきた。いまでは故郷の大事なものの、街の誇りとして、若い人たちが清掃活動やイベントに参加してくれているのがとてもうれしい。

井上智明さん（八幡西区）

徳川幕府が全国の街道に植樹させた松や杉は、旅の道しるべとなり、木陰で旅人の疲れを癒やした。時を経て、長崎街道の並木の多くが姿を消したが、曲里の松並木は人々に守り受け継がれ、いまでも往時の姿をとどめている。およそ600メートルに及ぶ並木の中に、江戸時代から立つ「街道松」が2本現存。

八幡西区

# 曲里の松並木



八幡西区

# 夜の工場群

くおたより

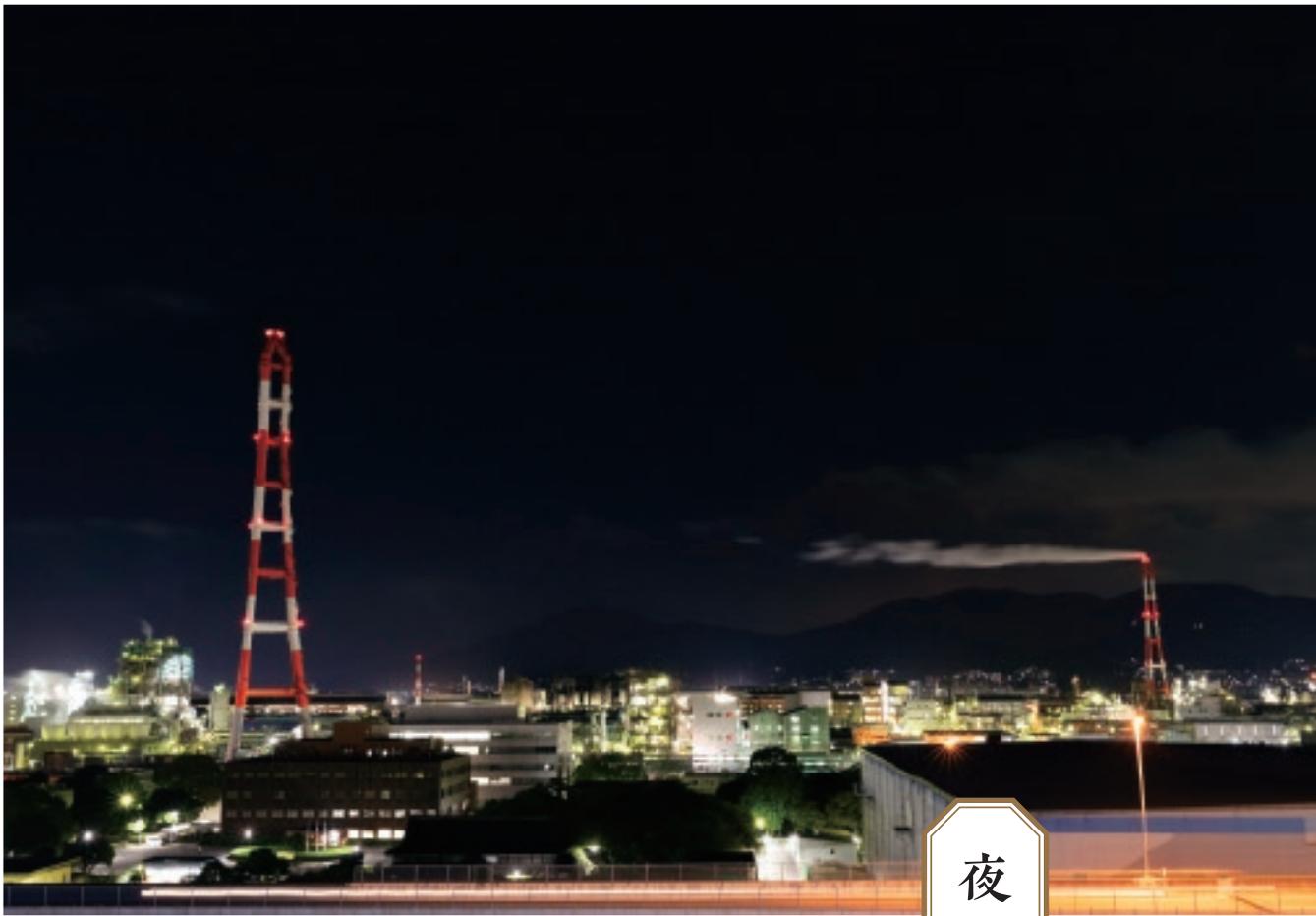
北九州、といえばまず思い浮かべる風景は、やはり工場。学生時代までは、工場から出るにおいなどが強烈なので、体に悪いのではないかといういやな思いがしていた。

それでも鮮烈だったのは、工場の夜景である。当時よく見ていたのは三菱化成の工場群で、その光はいまよりもずっと広範囲で、光の量もすごかった。

現在は若戸大橋がライトアップされていたりして、北九州は面としての夜景が美しい街だと思っている。

安藤進一さん（八幡西区）

「コムシテイ」屋上より撮影。歩みを止めない工業都市の象徴である工場は、夜になると違った表情を見せる。陽が落ちる頃から点りはじめた光はひとつ、またひとつと増え、街が闇にすっぽり包まれる頃には地上の星雲に。



「夫の残した言葉が支え」と籠田さん。ふたりで育てた会社も子どもたちも、順調に成長している。

## 夫が握った

### ジャングルジム



住宅街の公園の一角にある、何の変哲もないジャングルジム。籠田淳子さんにとっては、忘れることのできない場所である。建設会社を経営し、仕事と子育てで多忙な日々を送っていた

10年前、夫・修一さんががんに倒れた。すでに致命的な状態で、籠田さんは即座にすべての時間を看病に注ぐと決めた。

「仕事ひと筋の人間だったのに、あのときは会社なんて潰れてもかまわないって。本当だね」

造園を手がけ、緑が好きだった修一さん。外出も叶わなくなった彼を、籠田さんはある日、車椅子で病院近くの公園に連れ出した。顔に当たる風を感じ、うれしそうな横顔。病院に長くいるため風すら感じることでできなかつたのだと気づかされた。ジャングルジムの前に車椅子を止めた。すると、修一さんが手を伸ばしてパイプをつかんだ。

「ぐーっと力を入れて、立とうとしたんです。それを見ていて、泣けて泣けて仕方がなくて……。彼は、生きていたんです」

ふたりで過ごした最後の時間。ジャングルジムに、淳子さんは10年ぶりに触れた。まるであの日のように、梢を風が揺らした。



小学校6年から高校1年までの毎朝、夜明けの薄暗い光の中、田口順二さんは自転車に新聞を積み、この坂を登った。

大酒飲みの父は、小学生の頃からたびたび会社を休むようになった。映画のシナリオを書きたいと、ときに途方もない夢を語った。母は子育てしながらパートを掛け持ちし、兄も働いた。いまはそういう子はあまりおらんけど、と田口さん。現在は中学校で美術を教えている。兄がしていた新聞配達を自分もするのが当たり前だと思っていた。

雨の日も、雪の日も、友人たちが家族旅行をしている頃も、休まず新聞を配った。担当する地区でもっとも急で長い坂。でも、登っては配る、配ってはまた登るを繰り返すうち、いつの間にか登れるようになっていた。父は結局シナリオを書けなかった。あるときノートを盗み見ると、なぜか家の住所が繰り返し書かれていた。夢と現実の距離を、子どもながらに悟った。

稼いだお金を半分家に渡し、残りを貯めてモータースのギターを買った。フォークに熱中したそのギターは、当時の自分より大きくなった息子が弾いている。配達をやめてしばらくの間、よくこんな夢を見た。坂を登る。

配り終えて下る。すると、自転車の前かごに新聞が1部残っている。不配だ、と思ったところで目がさめる。10年ほど続いた。いまはさすがに見んだけどね、と田口さんは笑った。

## 朝の坂道

住宅街を縫うように続く、名もない坂。配り終える頃に、電車が動き出す音が聞こえた。



# 本屋の角

絵と文 牧野伊三夫

実家のある小倉南区の住宅街周辺には、これといって大きな道路もなく、近所に目立つ建物もない。それで小倉駅前の紺屋町あたりで夜遅くまで飲んでタクシーで帰るとき、運転手に「もと北方電車の通りの、小倉南高校を過ぎたところの本屋の角を左へ入ってください」と伝える。

しかし、この本屋というのは、もう無い。かつて本屋があった場所は空き地となり、その後、駐車場になっている。ここに本屋があったのはもう三十年ほど昔のことだが、いまだに市内を走る多くのタクシーの運転手たちは、「はい、本屋の角を左ですわね」と答えるのである。酔うと眠たくなる僕は、運転手に、そこを曲がったあたりで起こしてくださいと伝えようと、安心して居眠りをす。きつと軒をかいているにちがいない。

この曲がり角には信号があり、「中城野公民館入口」という交差点の名前もある。伝えたことはないが、おそらくそう言ってもわからない運転手が多いのではないだろうか。きつと僕以外の乗客たちもここをまがるときにそう伝えていて、運転手たちもおぼえているのだろう。



あるいは、配車をするときなど、運転手同士でもそう呼ぶので、代々語り継がれているのかもしれない。

もうすでに影もかたちもないものを、暗黙の了解として見知らぬ運転手と共有していることで、街にあなたかみのようなものを感じるのだ。こういう場所は、まだほかにあるのだろうか。十五年ほど前までは、例外なくふつうに「本屋の角」で通じていたが、新しい運転手もふえたからだろう、さすがに最近では通じないこともある。それで、近所にある神社の名前や番地を伝えてカーナビに打ち込んでもらうのであるが、これでは少々さみしく物足りない気がする。いつ頃まで、これで通じるのだろうか。

その本屋は小さな店で、今思えば漫画家の松本零士さんの母校、小倉南高校に近かったからだろう、他の書店にはない珍しいマンガ本がそろっていた。ちょうどテレビで有名な『宇宙戦艦ヤマト』の放映があった頃で、僕はまだ小学生だった。

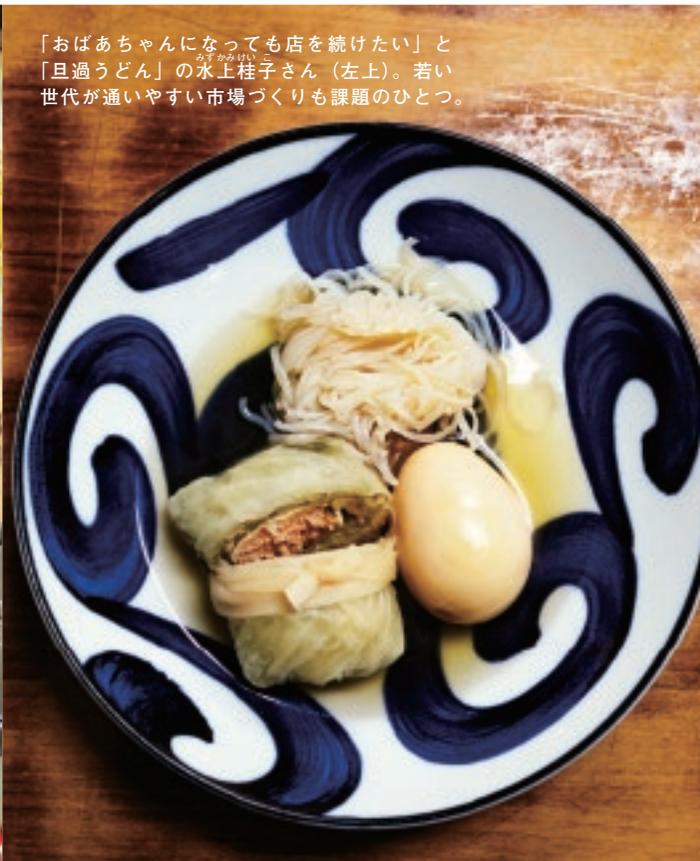
当時、僕の実家は小さなスーパーマーケットを経営していたのだが、すぐそばに松本零士さんのお母さまが住んでおられて買い物にいられていた。そのお母さまが、レジ打ちをしていた僕の母に「今度、息子のマンガをテレビでやるようになったので、見てください」と言われたことが、僕が松本零士ファンとなるはじまりだった。

『男おいどん』という、東京の四畳半で暮らすなんともさえない貧乏な男の日々を描いた作品があって、僕はすっぴりのめり込んだ。

この作品は、世界で初めての「インキンタムシ漫画」と呼ばれており、それまでヒーローが登場したり、ギャグの笑いを描いたりした漫画ばかり読んでいたので、衝撃だった。他にも、『銀河鉄道999』に登場するメーテルの原型と思しき、美女が裸になって登場するちよつとエッチな大人向けのマンガもいくつか置いてあり、誰の咎めもないというのに、こっそりと買っては家でいけない妄想をした。僕が「色恋」とか「エロス」という世界に興味をもつようになるきっかけは、松本漫画だったかもしれない。

お母さまから夏に松本さんが帰省されると知らされ、弟や友人たちと色紙をもってご実家におしかけたことがあった。もう、数日前から眠れないほど興奮して、当日は遠足の百倍くらいうれしい気持ちで会いに行った。そのとき、出がけに父から「手ぶらで行ってはいかん」と大きな西瓜をひとつ渡されたことをいまもよくおぼえている。

いい大人になって、酒に酔って、「本屋の角」というとき、僕にはちらつとそんな懐かしい思い出が頭をよぎるのである。



「おばあちゃんになっても店を続けたい」と「旦那うどん」の水上桂子さん（左上）。若い世代が通いやすい市場づくりも課題のひとつ。

小倉北区  
旦那うどん市場



メインストリートから分岐した通りの奥まで、個性豊かな専門店が軒を連ねる旦那うどん市場。料亭用の高級食材から日常の食卓に上るものまで扱う幅広い品揃えが魅力。「(新市場完成まで) 6年ちゅうけど、10年はかかるやろ」とは、乾物店「齊藤商店」主人・齊藤義雄さんの弁。



川に張り出した独特の様式は、もはや産業遺構の趣。「元気だけが取り柄よ」と笑う「岡本商店」2代目の岡本美智子さん。



「店主はみんな、一国一城の主。すごくたくましいですよ」と黒瀬会長。鯨肉店も鮮魚店も青果店も、この人から買いたい、と思わせるキャラクターの持ち主。



市場が好きというより、且過市場が好き——且過を語る人の声には、そんな思いが溢れる。小さな店が密集した通り。店先で日々繰り広げられる、店主と客の息の合ったやりとり。大正時代、神嶽川を通る船の荷揚げの場から発生した市場は、戦中、戦後を経て現在まで、北九州の生活の台所として、その生活の息吹を伝えてきた。

市場はいま、大きな転機に差しかかるうとしている。建物の老朽化に伴い、昭和後期から何度となく持ち上がった再開発、再整備の計画がついに実行に移され、すでに河川整備が始まった。これから工事が進み、且過市場は徐々に姿を変えていく。

この日も、通りや店先はいつもどおりだった。新鮮な魚や野菜が、笑顔と対話を経て手渡されていく。マスク越しになっても親密さは少しも損なわれない。「これからどんな市場にしていこうか？」と話し合うと、よく「昭和レトロの雰囲気を残す」という意見が上がりました。でも、市場に毎日来てくれるお客さんたちは、別にレトロだから来ているんじゃない。品揃えの豊富さと、コミュニケーションの豊かさ、結局、そこなんだ」と、商店街会長の黒瀬善裕さんは、しみじみと話す。「清潔で、安全で、何の心配もなく商売ができればそれがいちばん。お客さんも、私たちもね。そこに、ちよっとこれ（お金）がついてくれば」そう言って笑ったのは、青果店の店主。2代目、3代目として市場を次世代に受け継ぐ人たちが、そして新しく参入する若い世代の店主たちもいる。

だから、市場は歩みを止めない。営業を続けながら建物を更新し、誰もが安心して買い物をする、生活を楽しめる場所に進化する。昭和だから、レトロだから好きなんじゃない。皆、そんな且過市場を、愛してやまないのだ。

# ベラミ山荘



山荘内に飾られた田口さんの絵。昨年夏の1カ月間、毎週末に山の上へ通い、建物やベラミゆかりの品々などをスケッチした。

ベラミ山荘へ来てみませんか？ スケッチ画家・田口高明さんがそんな誘いを受けたのは、自身の個展の会場だった。

「その場所の存在自体は知っていたけれど、行くのははじめてやったね。おもしろそうだな、何か描いてみたいなと思って」

Bel-ami Ⅱ 美しき友人。麗しい名前は、かつて若松の中心街にあったグランドキャバレー「ベラミ」に由来する。昭和30年代から40年代、若松の社交場として地元政財界の名士が夜な夜な集い、繁栄を極めた場所。広いダンスホールを備えた舞台では華やかなショーが催され、東京や京阪神から多くの芸能人、著名人が訪れたという伝説の店のホステスたちの寮として使われていたのが、高塔山の緑の中に佇むこの山荘だった。

傾斜地に建てられた本館には、個室や共同の炊事場が往時の様子伝える。リビングルームのような広間には、バーカウン

ターやマホガニー製のグランドピアノも設えられている。

とにかく、静かだ。聞こえるのは鳥の声のみ。染みるような鮮やかな緑以外は、何も見えない。艶やかな夜の蝶たちは、街の喧騒を逃れ、ここでひとときその羽を休めたのだろう。それも、遠い昔のこと。社交場文化の衰退とともにベラミは歴史を閉じ、彼女たちも姿を消した。

「冬は寒いですけど、気持ちがいいですよ。ここにいるとかインスパイアされるといっか、想像力が刺激されるんです」

そう言うのは、現在はシェアハウスとして使用されているベラミ山荘で映画にまつわる物品を集めた資料室を開いている時川秀希さん。時川さんのほか、田口さんをここへ誘った映像制作者やウェブデザイナーがアトリエを設け、創作に勤しむ。昔もいまも変わらない豊かな緑は、表現者たちの時間を優しく包み、その心を癒やしている。



池や滝、東屋、大きな鳥小屋まで備えた庭では、顧客の園遊会が開かれたこともあったという。華やかなりし時代の面影は、いまはモノクロームの写真の中に。

# 錆の表情

小倉南区で絵を描いたりオブジェを作ったりしている美術家の林再恵美さんに、おすすめの風景について電話でたずねてみた。ところが、あるにはあるけれど、言葉ではうまく説明できないものなのだと言うのである。僕はなんとか聞き出そうとしたのだが、結局、沈黙におわった。それからしばらくたって、錆びたトタンの家や、鉄扉が錆びた倉庫などの写真が数枚送られてきた。林さんは自然の風化のなかで錆が作り出す色合いや質感に心惹かれ、錆のある景色を探し求めているのだという。しかしそれは、ただ錆があればよいというものではない。錆びはじめから錆びていく過程の微妙な調子のなかに、これという自分の好みがあるのだという。街中で偶然好みの錆のある景色に出合うと見入ってしまう。

家や扉だけではない。畑に張り巡らされた錆びた猪除けの針金を見つけ、畑の主と交渉してホームセンターで新品の針金を買って渡し、家に持ち帰ったこともあるのだそうだ。

ある日、錆びた鉄扉が並ぶ門司港の倉庫へ案内してもらい、錆の世界について話をうかがうと、まるで絵画を鑑賞するかのように語っていた。

その表情の微妙さについて、「わかってもらえるとは思えないから、誰にも話すこともなかったけど」と打ち明けるのだが、林さん、僕はわかりましたよ。  
(牧野伊三夫・文)

好みの錆がよく見つかる門司区限での一押しは、門司港の遊覧倉庫「浜5号」の鉄扉。自然と人工の造形美が見事に調和している。



## 八幡西区

# 旧・銀星幼稚園 (八幡バプテスト教会)



銀星幼稚園は、戦後、八幡東区から八幡西区に移転したキリスト教系の幼稚園。2005(平成17)年3月、開園から81年目の春にその役割を終えた。瀟洒な建物は、アメリカ人建築家で敬虔なプロテスタント信徒であったウィリアム・メルル・ヴォーリズの設計事務所によるもの。園児の礼拝堂としても使用された。長年、信仰と教育の場として人々の心の拠りどころであった場所らしい清らかな空気が、空間を満たしていた。

### くおたより

北九州から遠く離れたいま懐かしく思出す場所のひとつが、3人の子どもが通った銀星幼稚園です。有名な方が建築した素朴な幼稚園。小さな園庭での運動会の父親リレーは圧巻で、思い出すとつい笑ってしまいます。

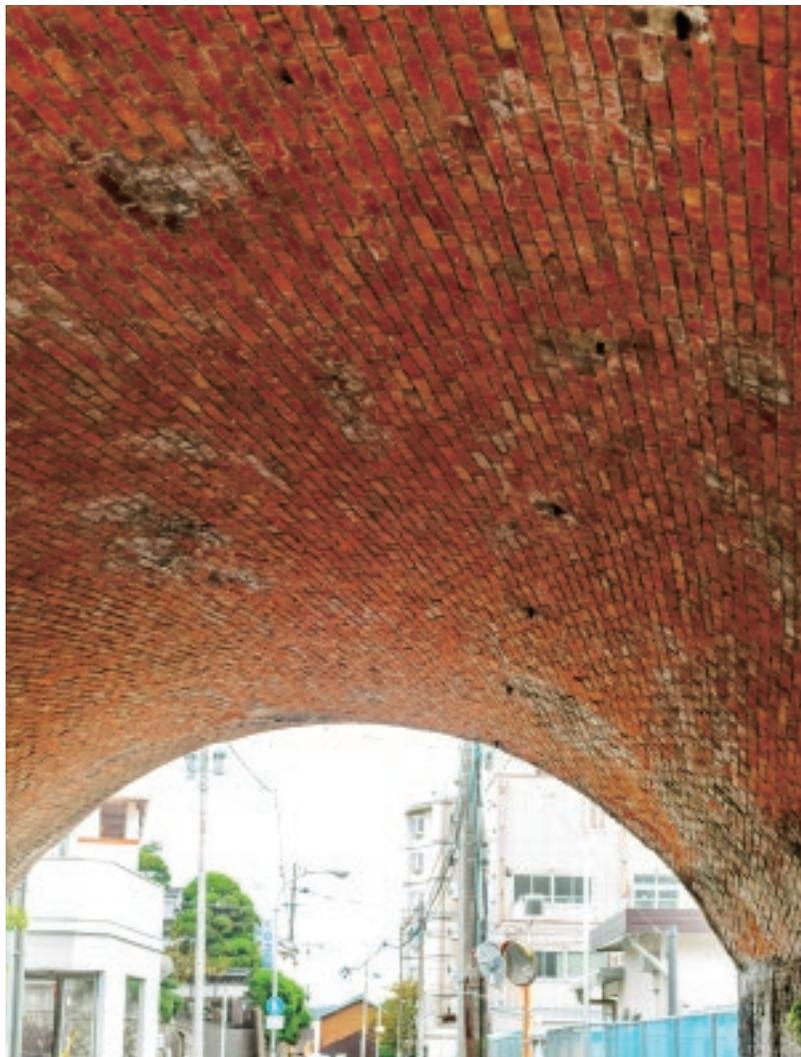
相澤あや子さん(千葉県松戸市)

1955(昭和30)年竣工。西洋建築でありながら、石を埋め込んだ三和土など、和のニュアンスが随所に。木のベンチは戦前から使用されているもの。



# ねじりまんぼ

映画『007』オープニング映像を彷彿とさせる、渦を巻くように絞られたレンガ積み。精緻にして美麗な手作業に思わず拍手。



「まんぼ」は「トンネル」の意。

線路とその下の道路が斜めに交差する際、強度を保つためにらせんを描くようにレンガが組まれているように見えることからこの名がついたという。

明治時代に確立された土木建築の手法で、現在も全国に何カ所か現存しているとのこと。奇妙な語感、そして奥へ奥へと引き込む引力を感じさせる、実に不思議な空間。覗き込むと、クラリとめまいを誘われる。

くおたより  
旧JR折尾駅舎の東口改札を出て、ロータリーを南東に進み、JR短絡線の線路を渡ってすぐ右に折れると、レンガ造りのアーチ橋が見えてきます。これは、折尾にあった旧西鉄北九州線折尾停留所の高架橋跡。「ねじりまんぼ」と呼ばれる特殊な工法によるレンガ構造物で、全国的に有数の規模だといわれています。  
私にとっては仕事帰りに角打ちに向かう途中でオンからオフに切り替わる、タイムトンネルのような空間でした。  
赤尾英司さん（八幡西区）

## 門司区

### 門司港の

### 夕陽

昭和25年生まれ。学生の頃にちよつと離れた以外は、ずっと門司港です。散歩に行く和布刈神社のあたりは、小さい頃からの遊び場で、神事で若布を刈るときに海に降りる階段や、当時たくさん岸に泊まっていた木造船の先っちょを渡り歩いて、よく魚を釣っていました。

山の中腹には動物園があつて、その下に水族館もあつた。遠足なんかで、よく行きました。ノーフォーク広場のところの大きな塩水プールも当時からあつて、よく泳ぎに行きましたよ。

あの頃は子どもが多かつたら、親は大変でしょ？ だから放つたらかいですよ。同級生にはこのあたりの店の子も多かつたから、みんなでよく遊びました。いまでも、ここで商売をやっている人が多いです。

関門橋が開通したのは昭和48年。昔といまとは、やっぱり雰囲気は違います。にぎやかになつて、落ち着きがなくなつた

というのかな。それでも、電車で博多に行って帰つて、だんだん門司港に近づくと、「ああ、静かになつた」と感じるのは、故郷だからでしょう。

昼から夜までずっと店にいるから、夕陽の時間に散歩できるのは休みの日だけ。下関に沈む夕陽を見ていていいなあと思うようになったのは、最近です。若い頃には感じなかつたね。船の汽笛が聞こえて、潮の音がして……。なんでかな？ やつぱり夕陽に自分が重なつて、「ああ、だんだん沈んでいきよる」と感じるからなんでしょうね。

（門司港 鮭処「富美」主人

稲吉康伯さん・談）



# Lemony

# Lemony

Lemony

# Lemony

Lemony



多くのファッションブランドを手がけるワイワイカンパニーがプロデュース！  
こだわりにこだわり抜いたハニーレモンシロップ[レモニー]誕生！

北九州産の“レモン×蜂蜜”

## Lemony

HONEY LEMONADE SYROP

潮風を受けて風味豊かに育った北九州産の無農薬レモンと、北九州の自然の中からミツバチが集めてきてくれた天然無添加の蜂蜜、さらに体に優しい国産のビートグラニュー糖のみで作ったこだわりのハニーレモンシロップです。夏はアイスで、すっきり爽やかに。冬はホットで、心もカラダもほっこりと。

オリジナルレシピ公開中!



lemon-mori.com/

ECサイト

### Lemonyの森

レモンの森 検索

こだわりの  
セレクト商品を  
多数紹介中!

# Lemonyの森

## 北九州から元気を発信

セントシティ2階「Pine tRee & K.stand」の店頭に並ぶ  
「生活雑貨」や「食品」の中から特にオススメな商品を  
厳選した通販サイトです!

レモンの森

検索



<http://lemon-mori.com>

# ワクチン接種後も 基本的な感染対策を継続しよう

新型コロナワクチンの効果には  
発症予防と重症化予防があります。

しかし、感染を防ぐためには、



など 引き続きの感染対策が重要です。  
基本的な感染対策を継続しましょう。

ワクチン接種の予約・問い合わせは  
コロナワクチンコールセンターへ  
**☎0120-489-199** 9時～17時(全日)

発熱・感染の疑いのある方は  
新型コロナウイルス感染症対策室  
コロナウイルス相談ナビダイヤルへ  
**☎0570-093-567**



## \*アンケート

『雲のうえ』34号をお読みいただきありがとうございます。ご感想、今後取り上げてほしいテーマなどのご要望を、綴り込みはがきでお寄せください。抽選で15名の方に以下のプレゼントをお贈りいたします。2022年5月31日消印有効。当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。\*応募はおひとりさま1号につき1通に限らせていただきます。複数応募は無効となりますのでご注意ください。

A:『雲のうえ丸』オリジナルグッズセット(トートバッグ・マスクングテープ)  
⇒ 10名様



B:北九州市ふるさとかるた(北九州市にぎわいづくり懇話会) ⇒ 5名様

青雲／白雲  
\*久しぶりに『雲のうえ』を拝読。よくまあこの時期にお出しになったこと！と感嘆しました。満足に取材できない状況を逆手にした構成も。頭から尻尾の先まで楽しく読ませていただきました。同じく外出自粛中の県外の友にも、これから送ります。(福岡県大牟田市・76歳女性)  
\*コロナ禍で家に閉じこもる日々。じっくりと読み進めました。北九州の文化、人物、食べ物、歴史の存在を感じ、あらためて素晴らしい街であると再認識。鳥町食道街から魚町、井筒屋への定番コース、コロナから自由になったら行くつもりです。(福岡県久留米市・73歳男性)  
\*33号に私の拙い文章を掲載していただき、ありがとうございました。7年前におたよりしたこともすっかり忘れていたので、近年まれにみるほどの感動を覚えました。ほかの方の投稿を楽しく読みながら、まだ見ぬ北九州の地に思いを馳せることができ、よい気分転換になりました。(東京都港区・55歳女性)  
\*コロナ禍での生活は、毎日毎日緊張を強いられ、普段の生活の感覚が遠くなった気がします。そんな中、御誌は写真、イラスト、文章のほどよいバランスミックスによって、北九州の普段の生活を感じさせてくれる。地域の魅力発信の枠を超え、その存在はますます意義深くするのは。(兵庫県宝塚市・42歳男性)

\*編集委員のつるやもこさん。お会いしたことはないけれど、文章や著書を読み、親しみを抱いていました。「雲のうえ」が続いていけばつるやさんファンのおもちゃも欲しいので、どうぞ頑張ってください。(福岡県糸島市・53歳女性)  
\*4月に転勤で東京から小倉へ。市の方やかつて住んでいた方の生の声、貴重でした。よい意見だけでなく、



創刊号に登場した門司・魚住酒店を15年ぶりに再訪！『雲のうえ』的・心の風景のひとつです。(編集委員)

対岸には数個の終夜灯が残り、2、3隻のボンボン船が行き交う光景の感動的だったこと！北九州には忘れない景色がたくさんあります。(鳥取県米子市・71歳女性)  
\*北九州で働いていた夫のもとに嫁いで12年開暮りました。3人の子どものためにも、いまは少し寂しい限りです。(若松区・68歳女性)  
\*次のテーマは「建築」でしょうか？有名どころのものもいろいろ意外な穴場スポットなどいろいろ出させてさう。ツアーがあったら参加します！(福岡市・45歳女性)  
\*最近話題のSDGs。ゼロ・ウェイスト、ロー・ウェイストにも関心を持っています。北九州市の環境への取り組みについて知りたいです。(佐賀県基山町・48歳女性)  
\*22歳まで小倉で育ち、郷土を思う気持ちは大きいのですが、変化の多い都市だからこそ変わらなくない、変えたくないというものも多いのではないのでしょうか？それが北九州の特質ではないかと感じています。(福岡市・56歳男性)

## \*北九州市民憲章

緑を豊かに  
清潔で美しいまちにします  
きまりを守り  
安全なまちにします  
人を大切に  
ふれあいの輪をひろげます  
元気で働き  
明るい家庭をつくります  
学が楽しさを深め  
文化のかおるまちにします

「雲のうえ」編集委員会  
牧野伊三夫 福山達也  
大谷道子  
発行 北九州市にぎわいづくり懇話会  
☎802-00001  
北九州市小倉北区浅野3丁目8-11  
☎093-551-8152  
(北九州市産業経済局 MICE 推進課)  
制作経括・印刷  
株式会社センターリンクタックス  
協力 北九州市のみなさま



次号予告  
風景の次は  
わが心の「味」を。

最新の発行情報は、北九州市にぎわいづくり懇話会ウェブサイトでお知らせしていきます。

雲のうえ 検索

\*バックナンバー  
『雲のうえ』29  
特集:北九州、市民の水。  
『雲のうえ』30  
特集:北九州やきとり豚バラ日記。  
『雲のうえ』31  
特集:北九州スポーツ探訪  
『雲のうえ』32  
特集:すし並一人前から眺める北九州。

●『雲のうえ』最新号がウェブサイトで見られるようになりました！  
北九州市にぎわいづくり懇話会情報サイトにアクセスしてください。  
⇒ <https://www.lets-city.jp/>

◎『雲のうえ』を送付希望の方は、お名前、ご住所、連絡先の電話番号、ご希望の号を明記のうえ、1～2冊/250円分、3～4冊/390円分の切手を同封してお送りください。◎送付は1名様1号あたり1冊、予定数に達した場合は終了させていただきます。北九州市にぎわいづくり懇話会情報サイトでも既刊の号の在庫を確認できますので、ご覧のうえお申し込みください。  
☎802-0001 北九州市小倉北区浅野3丁目8-1  
☎093-551-8152  
北九州市産業経済局 MICE 推進課『雲のうえ』送付係



関門橋



海峡ゆめタワー



角島大橋



GURURI KANMON

「近くてイイネ」

ぐるり旅の

北九州と

下関



関門海峡 Navi



赤間仲宮



旧秋田商会ビル



門司港レトロ展望室からの夜景



門司港駅(国指定重要文化財)

関門地域行政連絡会議